

当院における乳がんチーム医療の外来化学療法室看護師の取り組み

—外来化学療法導入についてのインフォームドコンセントへの介入—

外来化学療法室

○塩田 麻子 今橋 清子 三好 千晶 鍋島 曜子

薬剤部

小野川 雅英 八木 祐助 常風 興平 野村 政孝

第一外科

井上 真帆 船越 拓 甫喜本 憲弘 杉本 建樹

当院の外来化学療法室における実施件数は月 300 ～ 400 件程度で、乳がん患者の割合は 40% を占める。乳がん治療では、多職種の連携・協力によるチーム医療が必要とされ、当院でも 2009 年 10 月から乳がんカンファレンスを行っている。乳腺外科では、初回化学療法から外来化学療法室で実施しており、患者が安心感を持って外来化学療法を受けられるよう、また、よりプロセスに沿った看護が提供できるよう、初期から患者に密接に関わる必要があると考えた。そこで、医師による外来化学療法導入についての IC 時に、専任の薬剤師と共に同席し、看護介入を行うこととした。

看護師の役割として、患者の治療についての理解度や思いを把握し、必要時には補足説明などを行っている。また、精神状態のアセスメントとケアを行い、治療当日の流れやカツラの準備などの情報提供を行っている。そして、患者の状況やニーズに沿った継続看護につなげている。得られた情報や問題点は多職種の集まる乳がんカンファレンスでフィードバックし、チームアプローチにつなげている。

患者・家族と時間をかけて向き合うことで、疑問や不安が軽減できた。そして、今まで以上に信頼関係が構築され、安心感を持った通院治療につながっていると考える。また以前は、点滴中の短時間での関わりであったため、患者の全体像が把握しづらかったが、治療導入前から密に関わることで、患者の個別性とプロセスに沿った看護にもつながっている。

今後も、乳がんチーム医療を充実させるために、多くの課題に取り組む必要がある。その一つに、症状マネジメントやセルフケア支援のために、患者に関わる必要があるが、十分な時間を取るゆとりのない現状がある。今後は、その時間を確保して、より密接な関わりを行うと共に、看護師全体が他職種とも統一した関わりを持てるよう、パンフレットやマニュアルの整備に取り組んでいきたい。